

乳児期後半のコミュニケーション行動としての注意の発達過程

- おとなの操作への乳児の注意の向け方に着目して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
三宅 裕子

問題意識

乳児とおとなのコミュニケーションについて、乳児と他者との間で二項関係が築かれ、そこに対象物が持ち込まれることで三項関係が築かれると考えられており、生後9-10か月頃が三項関係の出現時期として注目されている。乳児は5-6か月頃に他者から対象物へと注意を移すと考えられている。そのため、おとなが対象物を操作することでようやく対象物を介した関わりができるという解釈のもと、二項関係から三項関係へと移行する上で、おとなの行為が乳児にとって「足場」としての機能を果たすと考えられている。この乳児にとって「足場」とみなされるおとなの行為の機能について、共同注視成立場面以外も含めた乳児の視線に着目し、乳児の注意の向け方から検討することに意義があるのではないかと考える。

研究目的

先行研究で、おとなが乳児との関わりの中で提供すると考えられている「足場」の諸側面について、乳児自身がどのように注意を向けるのかを検討することを目的とした。おとなが乳児に対象物を呈示する場面で、乳児は対象物ではなくおとなの手に注意を向けているのではないかとこの可能性を考え、おとなが物を操作する場面での乳児の注意の向け方および呈示された後の物の操作に着目した。

方法

5か月から9か月の乳児19名に実験的観察を実施し、ビデオカメラで撮影した。課題の内容は、おとなが積木を操作した後に呈示する「操作課題」、おとなの手を介さず遮蔽板から積木が呈示される「遮蔽課題」、積木を持たない状態の手を呈示する「指さし課題」の3つを実施した。分析対象は、乳児の視線および観察者が呈示した後の積木の操作とした。

結果と考察

第1に乳児はおとなの物の操作場面において、「物」と「手」の組み合わせをよく注視する傾向にあった。第2に操作の加わった「物」と操作の加わらなかった「物」では、操作の加わった「物」の方をよく注視する傾向にあった。また、呈示後の物の操作については、月齢的な変化はあるものの、おとなの操作の有無による大きな違いは認められなかった。

これらのことから、5か月から9か月の乳児が物をよく注視するのは、対象物に興味を示すという理由からだけでなく、おとなの手の操作を注視する際に手がかりとなるために注視しているという解釈も可能であると考えられる。この解釈によっても生後9か月頃までの乳児の注意の発達においておとなが対象物を操作することが「足場」としての機能を果たすと考えられた。